

所 感

山 口 信 義

戦後に於ける我々の衣・食・住の生活は、今日あるを何人も予想し得なかつたほど著しいテンポで変ぼうした。この生活水準の向上は、全く化学技術の高度化がもたらしたものと云えよう。

更に今やアトムとエレクトロニクスを中心とする第四次産業革命時代を迎えんとしているのである。当然人類の生活は、益々高度化され、スピード化されて、激しい変革をきたすものと想像されるのである。このような変転きわまりない時世に処する、化学技術者の使命は、国家にとっても、又一企業体にとっても、愈々重大さを加えるであろう。最早今日、化学工業の企業体にとって、現状維持は即ち脱落或は衰退を意味するもので、生きんと欲すれば、好むと好まざるとに拘わらず、常に前進のみが運命付けられているものと私は信じている。而して、その前進の基盤は一に技術研究の充実と進展とに在りと云つても過言ではなからう。

当社の研究部も本格的な発足をして年余を出でず、施設・人員ともに、質的にも、量的にも、かならずしも満足すべき現状にあらず、未だ揺籃時代に例えられるが、前途技術に対する経営者の理解ある認識と、研究部員の燃ゆるが如き意欲と絶えざる努力とによつては、抜群の成長を遂げ得られるものと、期待し、又確信しているのである。又研究部員たると、生産現場員たると問わず、およそ我れ技術者なりと自認するものは、四・六時中、一挙手、一投足すべて、技術研究者的態度を以って、職場を処理し観察しなければならぬ。この日常の研究的態度の累積の上に研究の成果が礎かれてゆくのである。技術研究の進展は併行して、会社の発展を約束するものであるとの信念を以って、一層奮起せられんことを切に希うものである。

当社の「研究報告・第1号」は幸い産声早々に拘わらず、相当に内外の好評を得たことは、まことに喜びに堪えない。然し私は報告そのものより、その背景となっている技術の研究が本当に血となり、肉となることのほうが一層喜ばしいのである。(当社専務取締役)